

「わたしには、わからない。」

と、つぶやいてしずかに目をとじました。

英世は、何を考えていたのだろうか。何がわからなかったのだろうか。黄熱病にかかったことなのか？病原菌のことなのか？

しかし、細菌学者野口英世らしい最後の言葉だと思えます。

昭和三年（一九二八年）五月二十一日、日本のかた田舎、会津のほこる猪苗代湖のほとりで生まれて、てんぼうになった野口英世は、世界の中で自分の持てる力を爆発させ、五十一年六カ月の一生を終えました。

「野口死す」のニュースは、すぐに全世界に広がり、各国の新聞は、「全人類の恩人を失った」と最高の表現で報道しました。

「人間ダイナモ」と言われ、ねむる時間も忘れて研究を続けた野口英世は、今ニューヨークのウッド・ローン墓地に埋葬され、永遠の眠りについています。